

ジュニア・リーダーが 国連本部でスピーチ



議長を務め、熱心に聞き入るハン・スンス韓国元首相



皇太子様とお会い

当町ジュニア・リーダー（以下、JL）「MVCぶらんこ」を代表して、三浦ほのかさん（歌中山）が3月6日（水）（日本時間7日未明）、ニューヨークの国連本部で開催された、国連事務総長主催「水と災害に関する特別会合」において、皇太子様や各国の専門家等を前に、世界各国からの支援に感謝の気持ちとスピーチ活動について英語でスピーチを行いました。

緊張しながらも堂々と世界へ向けたスピーチをし、議長を務めたハン・スンス韓国元首相から賛辞をいただくなど、目を潤わせながら聞き入る人もおり、場内は大きな拍手で包まれました。

この特別会合への参加は、被災地の子ども目線のハイレベルな情報発信を検討していた日本事務局が、当町に多大なる御支援をいただいているNPO法人ワールド・ビジョン・ジャパンとの活動の取り組みに目を向けられたことから、当町において、震災後のJL活動の再生に大きく貢献をした三浦さんを推薦し、バン・ギムン国連事務総長から招待されたものです。

スピーチ後には、皇太子様とお会いになり、「大変すばらしかったですよ。子どもに笑顔を届けることはとてもいい活動ですね。」と、ねぎらいのお言葉をいただきました。

私は、中学校1年生からジュニアリーダーという地域での活動を行っていきます。ジュニアリーダーとは、教育委員会の育成・指導のもとで、地域の子ども会活動のお世話をはじめ、小学生を対象としたキャンプ等の運営補助や地域イベントのお手伝いをする中高生ボランティアの事です。

これから、私自身が体験をした東日本震災後の避難所での生活についてできたジュニアリーダー活動についてお話しします。

2011年3月11日。南三陸町は、10メートル以上、高いところでは、20メートル以上の津波が押し寄せ、町の7割以上を失うという壊滅的な被害を受けました。私は、学校が休みだったため、家で横になっていました。突然の大きな揺れに驚き、すぐに外に出ようと思いましたが、どんどん大きくなる揺れに身動きが取れなくなり、玄関で1人うずくまっていたところを、外で仕事をしていた父に助けられました。

高台に避難をし、海の様子を見てみると、どんな波が引き、知り合いの皆さんの船が波に引かれ沈んでいく様子は、映画のワンシーンをみているようでした。私の家も一瞬で津波にのみ込まれ、予想以上に津波は大きく、逃げても津波は押し寄せてきました。津波と同時に雪も降ってきました。凍える寒さのなか、私たち家族

は、さらに高台にある保育園に避難しました。

約2か月間の避難所での生活。家が流され大切なものがなくなり、これからどうしようという不安な気持ちや、知人・友人の安否、ジュニアリーダーの仲間の安否が気になり、何も手につかなく、ただただ毎日が過ぎていきました。そんなある日、笑顔がなくなってきた暗い小さな子どもたちの姿が目に入ってきました。私は、すぐにこの子たちを助けてあげなくちゃと思いました。

子どもたちは地震への恐怖や、ばたばたしている大人たちを見て、不安が大きくなったり、遊びたくても遊べなかったり、小さな子どもたちなりにたくさんものを抱えていたはずだったと思います。今この場でこの子たちを助けてあげられるのは自分しかないと思いい、この避難所でジュニアリーダーをやらうと決めました。子どもたちとはすぐ仲良くなり、本を読んであげたり、絵を書いたり、カルタをしたり、ジュニアリーダーで身に付けた手遊び歌をしたり、遊びは限られていましたが一緒にいてお話をしているだけで子どもたちの表情は明らかに違いました。子どもたちといるだけで私自身も楽しく笑顔でいれました。毎日一緒にいるうちに子どもたちは、私のことを「校長先生」と呼ぶようになりました。

震災から1か月がたった4月の半は、小さなコンサートが開かれました。私は、そのコンサートの司会を教育委員

会の方から任せられました。久しぶりに歌をうたったり、体を動かしたり、子どもたちはすごく楽しそうに、コンサートの会場は一瞬で笑顔につまれました。子どもたちの笑顔を見た保護者たちは、「笑っているのを久しぶりに見たー」と言いながら泣いていました。子どもの笑顔の力はすごいなーと思っただし、私たちがもつ子どもたちを笑顔にしてあげなくちゃ。と思いました。

南三陸町の復興へ向けて、私たちジュニアリーダーには何かできないのか？被災した地元をいつか必ず復興させたー!!という思いから、町の復興にジュニアリーダーの意見を反映させようと、ワールド・ビジョン・ジャパンさんの協力のもと、復興まちづくりワークショップを行いました。役場の方から復興計画について説明していただいたり、町内の小中高生に復興についてのアンケートを行ったり、それらをもとにワークショップを積み重ねてきました。ワークショップをしていくうちに「子どもに笑顔・地域に夢を」というテーマができました。「子どもを笑顔にする



ためには？」夢ってどうやって持ってもらえるの？」難しい問題がたくさんありました。「地域の中で年代関係なくたくさんの人とつながりを持ってほしいよね」ということから、公民館の中にカフェをつくるのはどうだろうかと考えました。公民館にカフェがあったら、たくさんさんの年代の方が利用してコミュニケーションをとり、人と人とのつながりをつくれる場所になるはずだと私たちは考えました。その他には、公園をつくる、公園をつくらせたら子どもたちが遊べるしお年寄りの生活不活発の改善にもつながる。図書館の中には町の歴史を知る展示コーナーがほしい。災害に強い町にしたい、ということから大きな避難マップを町が目立つところに置く。などといったことを考えました。こういった考えを提案書という形にし、昨年の6月に町長さんへ直接手渡しをしてきました。町長さんからは、南三陸町が復興していくうえでジュニアリーダーの皆さんとは復興のパートナーでありたい。という言葉を送りました。

私たちジュニアリーダーは、自分たちで考えた公民館で活動することが夢であり、これからの目標です。ジュニアリーダーとして、子どもたちとの関わりや町の行事に参加している私たちにしか感じることでできない、町に対する思いを含めた提案書ができて、素直に嬉しいと思うし、自分が町の復興に携われたことを誇りに思います。は

じめは、ジュニアリーダーが復興を考えるなんて無理だと思っていた大人も多くいたはずだと思えます。しかし、私たちジュニアリーダーは、最後までやり遂げることができました。もちろん、私たちが支えてくれる大人の方々がいたからです。「子どもになんかムリだ。」と言う前に少しでもやらせてみてください。大人だけでは見えない私たちの目線があります。時間はかかるかもしれませんが、でも、たくさん新しい発見があるはず。私は、世界中でたくさんの方々が私たちに助けられました。本当にありがとうございます。

今もボランティアの方がたくさんいます。でも、いつまでもボランティアの方に頼るわけにはいきません。新しい南三陸町をつくっていくのは、ボランティアの方たちではありませぬ。私たちがなのです。「子どもに



笑顔・地域に夢を」を今後もテーマにし、私たちが新しい南三陸町をつくり、南三陸町民として、そして、ジュニアリーダーとして、南三陸の人たちに夢と感動を届けていきます。

Hi, my name is Honoka MIURA, and today I have the great privilege to share with you my experience of life at the emergency shelter after the March 11th earthquake and tsunami. I would also like to share with you what I and other Junior Leaders did to help with reconstruction after the disaster and the ideas, hopes and dreams we have proposed to our mayor, Mr. Sato, for the future rebuilding of our town.

I became a Junior Leader in my first year of junior high school. Junior Leaders are junior and senior high school students who are supported by the Board of Education and do volunteer work under their supervision. For example, we get involved in Board activities for local children, provide administrative support for primary school children and help with local camping events and such.

On March 11th, 2011 I was at home because school was closed. Suddenly, I was surprised by huge shockwaves. I tried to go outside but I could hardly walk as the shockwaves grew bigger and bigger. Finally, I made it to the entrance and sat there. My father, who was outside, helped me get out of the house and we ran to a nearby hill.

When I looked to the ocean, I could see the bay receding - a sign that a tsunami is coming. I watched a ship owned by my father's friend being pulled out to sea and sunk. It seemed like a scene from a movie. Then my house was swallowed in an instant by the incoming tsunami. It was bigger than anyone expected. No matter how we tried to escape, it seemed to surge forward. It was snowing that day. The cold was numbing and we finally managed to get to a shelter in the nursery school on the hill.

We lived at the shelter for about two months. Our house had been swept away and our important possessions lost. We worried about our future, whether friends had survived, and whether our friends among the other Junior Leaders were safe. All we could do was to live each day; we felt helpless.

As the shock became less, I started to realize that the children at the shelter were all unhappy. No one was smiling, and I realized I had to help them. All the adults were afraid of the earthquake and had made a big fuss about it. The children sensed this, and it magnified their own fears. The children were unable to play, even if they wanted to. I thought they were suffering a lot.

It was then I began to think that I am the only one here who can help these children. That's when I decided to be a Junior Leader at this shelter.

I made friends with the children quickly. We read books together, drew pictures, played cards, and practiced the hand-play songs that I had learned as a Junior Leader. Our possibilities for play were limited in the shelter, but the children clearly became happier even if we only sat together and talked. And I was happier just being with them. They started calling me "the